

## 久内清孝\*：キリフリザサの實生とその發育經過

Kiyotaka HISAUCHI\* : Seedlings and development of rhizome of a bamboo (*Arundinaria nikkoensis* Nakai).

昭和22年7月18日に上州伊香保山中、俗称ツ、ジが原に竹の実が多産するとき、かつ村民が補食のため採集中ときいたので、早速現場へ行つて見たら、キリフリザサ (*Arundinaria nikkoensis* Nakai) がさかんに結実していたので、少々採集して持ちかえり、東京で直ちに播種したところ1箇所は直に発芽し、他は翌春発芽したので、それらを1箇所づつ土鉢にうえてなりゆき、特に根莖の発達に伴う分枝の形式を観察したので、それを出来るだけかんたんに記すことにした。したがって、こゝでは既往の文献や知見にとらわれないことにした。しかし、それを無視したのではない。さて発芽したものは第1図のように 発根して1本の稈を地上に挺出し、頂に葉をつけた、このときの肩の毛は属を特長づける程はつきりしなかつたが、いかにもメダケ式であつた。この幼稈の下方の節からは逐次枝を出し、翌年または秋頭には、幼稈の最下部から根莖を出し、第2図のように、その先は地上に現れて初稈と同じような経過をとつたが、初稈に比してやや太く、葉も少しく大きく、肩の毛もやや発達して見えた。更に次には初稈の基部を起点として、別の根莖が出現した。根莖の基点といつても、節からでるのであるから、もちろん起点には上下の関係があり、厳密に同一点でないことはいふまでもない。かくして、遂に第3図の様になつたが、これから先は成株の場合と同様にすゝみ、そうして第2—3次の根莖は分枝もするし、稈も出すであらう。第3次根莖は先のものよりも太く、葉も大きく、アズマザサ属の葉形に接近してきて、そのころには最初に出た稈は著しく衰頽して、將來消滅する如く見えた。以上の経過から見て、根莖は地中を横走して水平にひろがるであろうが、それは將來をまたなければ見られない。以上が3年間の観察で、まことにおぼつかしいが、

根莖の分枝法は、結局これで判明することで

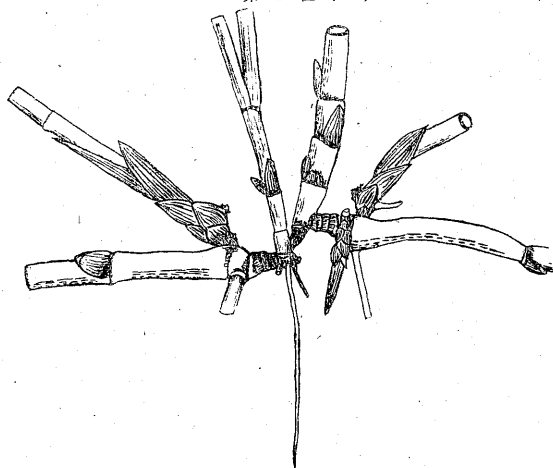


第 1 圖 (1/2)

\* 東邦薬科大学 Tôhō Pharmaceutical College, Tsudanuma, Pref. Chiba.



第 2 圖 (1/2)



第 3 圖

(× 2)

あらう。問題は従来の 2 形式をどうあてはめるかであるが、その点は識者の判断にまかせる。かえり見れば、明治 23 年に植物学雑誌第 14 巻で、牧野先生が分類学的に竹類研究に発足され、同時にこれと並行して、柴田桂太先生が營養器官の形態学的解明を試みられてから約半世紀を過ぎ、現在では竹の大家が簇出して、其研究も微に入り細をつくしているが、なんといつても、開拓者としての牧野先生の功績は大きい。いま、先生の米壽にさいし、かつて先生の竹のお伴をした余は、こゝにさゝやかながらこの小文を草して先生の長壽を祈る。尙竹を玩ぶには、發育の経過から見て、根莖の尖端から発出したものだけを基準として比較するか、枝同士比較するか、要するに同一起原のものでしかも同一季節のもので比較したい。前記の小実験から見て、前者と後者との比較はなりたちにくい様に思われる。この点に関しては、大いに識者の熟考をのぞむ。そのためかどうかは知らないが牧野先生は、いつも、根莖の先端から出たものを必ず採られた。根莖の先端や、根莖の枝として出たものゝ主稈から出た葉はいずれも大きく、形も似ているが、側枝のものは常に小さく、ことに葉幅が狭い。

**〇さくら**の話 “満洲へ行つたのは櫻を見に行つたのであつた。先づ吉林へついて、少し早かつたから、こゝで櫻の花の咲くのを待つた。老爺嶺へは問題の櫻を何度も見に行つたものだ。映画にも撮られた。この時にはほんとうによく櫻をみて來た。私の考へでは満洲の櫻は朝鮮の櫻と同じもので、なかなか変化が多い。

そこで日本と大陸とをまとめて大きく櫻をみると先づ四つの ssp.(亞種)に分けられると思う。第一がヤマザクラの group、次がケヤマザクラの group、第三がオホヤマザクラの group だね。日本の櫻は沢山あつてもみなこの三つのものからのかわりものだ。第四が大陸の櫻とこう四通りあろうと思う。

ヤマザクラとケヤマザクラは葉っぱ一枚でわかる。ケヤマザクラはヤマザクラと違って、葉の裏が緑だし、もとは丸っこくなるし、先は自然に尖っているからすぐにわかる。大陸のサクラはオホヤマザクラに似ているが、葉でも区別がつく。花は中々美しい。花瓣に大小があるし、廣狹もあつて変化に富んでいる。満洲ではこれを薪に切つてしまうので老木がどうもないのは惜しい。

ナデンは自宅にも植えているけれど、そのでどころは不明だ。よく盆栽にしたてゝ居る。全体としては変化に乏しい櫻だ。毛が濃る多いが毛の多少だけではやはり分けられない。一重と半八重とがあり、果実も少しはなるが、余り成らないので確めるのに困る。一時はオホヤマザクラだろうと思つた事もあつたが、どうも違う。今のところでは *Prunus Lannesiana* の内のものではないかと思う。”

(牧野先生一夕話 III—文責在編輯)